



<<アロースタッドの主>>

「アンバーおじさん、そろそろ帰ろうか」。アロースタッド主任の富菜新一さんが声をかけると、静かに鼻を鳴らしてアローの主・アンバーシャダイが放牧地の入り口へ歩いてきた。

「今日は寒かったな」……。富菜さんとたわいのない会話をしながらアンバーシャダイが洗い場までやってくると、乗り運動を終えた息子のメジロライアン、メジロパーマー、ダイナコスモスがスタッフにブラッシングを施されていた。アンバーシャダイも乗り運動を消化して馬体の手入れへ。ライアン、パーマーがじゃれついて、「ホレ、もうすぐ終わるから待ってろ」とスタッフに声をかけられているにもかかわらず、何度も甘えるのに比べて、アローの主は微動だにせず、穏やかな表情でブラッシングを受けていた。ブラッシングの途中、いつものくせでボロ（馬糞）をすると富菜さんがほうきとちりとりを持ってきた。アンバーシャダイはあ・うんの呼吸で、富菜さんが片付けやすいように、ボロをまたいで一歩横にずれる。「もう、いいよ」。仕事が終わえたのを確認すると、また、元の位置に戻って再びブラッシングに目を細めた。

「アンバーは賢いでしょう。いつもこうやってどっしり構えてるし、仕事をしやすいように動いてくれるんだよ。アローの主？ そうだね(笑)。一番の主だったサクラシゲキがいなくなっただけからは、貫禄、風格ともに主だね。実績でも昨年はリーディングサイアー9位で、うちでは一番。息子のライアンも3歳リーディング2位で、クラシック候補生を出してくれた。立派な息子に負けられないと、親の威厳を示してくれて嬉しいよ」

アンバーシャダイが種牡馬として静内の住人になってから14年。寝食を共にしてきた富菜さんは我が事のように声を弾ませた。

昨年は、ベストタイアップで中山金杯を制覇。クラシック戦線に皐月賞、ダービーともに3着に健闘したメイショウジュエニエを送り込んで、リーディングサイアー9位に輝いた。そして今年もベストタイアップが中山金杯で連覇を飾り、昨年の活躍の再現を予感させる幸先のいいスタートを切った。今年21歳を迎えるアンバーシャダイだが、種付け頭数も毎年70頭以上をこなし、ますます勢いに乗っている。

種牡馬としてはメジロライアン（宝塚記念）、カミノクレッセ（日経新春杯）、レインボーアンバー（弥生賞）など大物産駒を輩出しているが、現在の競馬ファンにとって競走時代の雄姿は、なじみが薄いかもしれない。

現役時代は昭和55年にさかのぼる。ノーザンテーストの初年度産駒として4歳の1月にデビューを果たし、初のG1タイトルを手に入れたのは5歳の暮れの有馬記念だった。当時の最強馬ハウヨウボーイを破った勲章は、一気にアンバーシャダイをスターホースに押し上げた。さらに6歳に入って、天皇賞・春2着、天皇賞・秋4着、有馬記念2着と、着実にG1戦線を駆け抜けていくが、勝利を目前に苦杯をなめていた。ようやく2つ目のG1を手に入れたのは7歳の天皇賞・春。歴戦の名馬と戦ってきたプライドを見せて、前年の菊花賞馬ホリスキーを退ける悲願のVだった。そして引退レースとなった思い出のグランプリで3着に健闘。常に全力でターフを駆け抜けたひたむきな鹿毛馬らしい幕引きだった。

「スタリオンにやってきた当初は、極端にいうと骨と皮だけの状態だった。種馬として体をよく見

せるために肉をつければいいわけだけど、ただ太らせたら馬に負担をかけてしまうから、運動しながら食べさせてのくりかえしだった。種馬らしく見せるのに2、3年はかかったなあ。それだけ競馬場で目一杯の競馬をしてきた真面目すぎる馬なんだと思ったね」

偉大なる父ノーザンテーストの名を高め、G12勝を挙げながら、競馬史において地味な仕事人の印象が強いアンバーシャダイ。ハイセイコーで一大競馬ブームが訪れ、トウショウボーイ、テンポイント、グリーングラスによって競馬の醍醐味が全国に浸透したTTG時代が築かれたあとに競馬場に現れ、ミスターシービー、シンボリルドルフが競馬ファンを熱狂させた3冠馬誕生を前に姿を消した。語り継がれるスーパーホースのはざまで、空白の時代を必死に埋めるように勝負に挑む闘志は、オールドファンをしばれさせた。アンバーシャダイの存在は競馬隆盛の土台になったといえる。

アンバーシャダイは紳士的に仕事をこなす種牡馬だ。余分な力を使わず、種付けに集中する姿はベテランそのもの。

「どんな繁殖牝馬にも勢いで向かっていくんじゃないでソフトだから、こっちも安心して自分の仕事に集中できる。もう種付けを心得てるから若いスタッフにはアンバーの方が仕事を教えているね。馬から人間が得ることが多い馬ですね。でも種馬がいい種付けをするには人間との信頼関係が一番必要だから」

馬との信頼関係は普段の管理から全てにおいて種馬を把握し、常にベストの状態を維持していくことであり、自分の子供以上に馬に愛情を注ぐことが必要不可欠だという。アンバーシャダイとの14年に及ぶ時間の中で富菜さんは学ぶことが多かった。

「馬は目で訴えてくるけど、アンバーは特に目でしゃべってくる馬だから普段からしっかり接していないと信頼関係が生まれなかったと思う。一時期、爪を悪くした時に、痛いのが辛いんだろうね。"おい、なんとかしてくれよ"って切ない表情浮かべてね。でもこっちも試行錯誤で治療してるのがアンバーも分かるから我慢する。痛みを和らげるためには、蹄鉄をはかす方がいいけど、裸足の方が治りがいい。とうとう馬より人間が我慢できなくて、ちょっとの間だけ蹄鉄をはかせたことがあったなあ」と富菜さんは懐かしそうに語った。誇り高く、賢いアンバーは普通の人間には"腹をみせない馬"だという。だからすべてをさらけだす相棒にとっては、アンバーの気持ちが手に取るように分かるのだろう。

いつも風格を漂わせる種牡馬姿をファンに披露しているが、やんちゃなかわいらしい一面を富菜さんにはよく見せている。

「放牧地に放すとき、必ずニンジンをおねだりするね。ふざけてあげないと、必ずもらうまでずっとそばにくっついてる。それに、例えば昨日お酒を飲んだスタッフが調教をつけるでしょう。もちろんスタッフは翌日すっきりしてきちんと仕事をしているわけだけど、アンバーは敏感だから分かる。いつもは真面目なのに、そういうときはちょっとふざけて、立ち上がるフリをしたり面白がって遊ぶときがあるよ」

富菜さんはアンバーの生き字引のように、様々なエピソードを披露してくれた。

「でも、これだけ世話してても、たまにライアンと間違えちゃうんだよ。顔も雰囲気も瓜二つ。違うのはアンバーの方が一回り小さいぐらいだからね。ライアンの担当者がアンバーを手入れし

てくれていると思って、すまんとか言うのと向こうがキョトンとしてるから、アンバーの放牧地行くと、馬が待ってる（笑）。俺、キス魔だからさ、悪いなって顔にキスすると、またスキンシップかって顔してる。自分の子供と同じだと思ってたけど、ライアンが来て、いつのまにか同士みたいな関係になってきたね。ライアンから大物産駒が出たりすると、一緒に酒を飲みたくなるような存在だね。俺だけじゃなくてスタッフそれぞれがアローの馬たちに同じ思いを抱いてると思う。それが種馬を囲んだスタリオンのチームワークになってるし、誇りだね」とスタッフの気持ちを代弁する富菜さん。ライアンのモヒカンの誕生となったオムシ（皮膚がかゆくなる北海道の風土病）は、アンバー譲りというのも親子二代で携わるスタッフにとって、嬉しい遺伝かもしれない。

父ノーザンテーストから確実に受け継いだ財産にたくましい強さを吹き込んで息子メジロライアンに託すアンバーシャダイ。11年連続リーディングサイアーに輝いた歴史的名種牡馬の父や、初年度産駒からクラシックに産駒を出走させる息子に比べて、華やかさより堅実さが漂うアンバーだが、中継役として最も重要な縁の下の力持ちになっている。

競走時代の一途なイメージも重なって、典型的な"日本の親父"を彷彿とさせる。

「アンバーは苦労人って感じがするね。7歳までは競馬に全力投球してきて、21歳を迎えてやっと後継種牡馬のライアンを出した。ライアンは生まれながらのお坊ちゃんで、競走馬としてみんなに愛されたし、種牡馬としても最高に近いスタートを切った。でも、それだけアンバーが苦労してきたからライアンは光り輝くことができた。ライアンは幸せ者だと思うし、親父を超える種牡馬になって欲しい。アンバーもまだまだ息子に負けない子供を出す可能性をいっぱい持ってる。アンバーの目標も、目指せ親父だね。どれだけノーザンテーストの域に近づくことができるか。年を取っても大物を出してきた親父のように、クラシックに縁がある馬を出してほしい」

エールを送る富菜さんの思いを琥珀色に澄んだ瞳が確実に受け止めたように見えた。

1997年寄稿(文中敬称略)